文法的格について

島崎淳彦

〔I〕

1. はじめに

一般に名詞，動詞などに附随してあらわれる文法現象に性の区別（男性形，女性形，中性形），格の現象，数の区別（単数，複数，雙数），時称，人称の区別などがある。しかし，言語によっては，これらのうちのいくつかを全く知らないものもあるし，又，通時的にみて，昔は存在したけれども，現在は消失してしまって存在しない現象であるという事もある。逆に，その存在が不明瞭で潜在化していたものが，後になって顕在化して来た現象もある。例えば，性の区別，数の区別などを知らない言語に日本語，中国語などの他に，アルタイ系の言語とされているモンゴル語やツングース語などが挙げられる。しかし，時称と，これに関連するアスペクト及びモドウスの現象は，いずれの言語に於いても，動詞が文に機能する限り，有形的にせよ，無形的にせよ，その存在を無視する事は出来ない。同様に，名詞，又は名詞的に使用されているあらゆる言語要素には常に格の現象があらわれる。例えば，「波立つ」という日本語の表現では，積極的，顕現的に格を明示する要素は何もないが，この文の構成は，その間に格的現象の存在を明瞭に示していると云える。この場合は，顕在的ではないにしろ，潜在的な形によって格の現象があらわれているのである。格の現象に於いては，顕在的な形であらわれるか否か，或いは有形か無形かは，格の本質に関係する第一義的な問題ではない。

一般にヨーロッパ諸言語に於いては，進展の大小の差はあるにせよ，時代と共に形態法の簡素化の傾向を進めている。前述の文法現象で，名詞又は名詞的な言語要素に附随してあらわれる性，格，数，のうち最も早く脱落もしくは簡素化されやすかったのは，格であるとされている。勿論，ロシア語などのよう

なスラブ系の言語や，ゲルマン系の言語でもドイツ語のように簡素化の進展の小さいものもあれば，英語のように簡素化の進展の大きいものもある。しかし総じて形態法の簡素化の方向へ進んでいる事は否定出来ないところである。特に英語に於いて簡素化が大きいのは，歴史的にたび重なる異言語の侵入と支配を受け，長く低層社会の民衆語であった事が大きな原因であるとされている。現代英語の格は，顕現的な語形のみに注目して考えるならば，名詞，人称代名詞，関係代名詞などの二種類乃至三種類を考えればよいとされている。しかるに，理論上，格の総数は，三百数十種類であるとされている。勿論，これだけの格の数を「格」として現実に所有している言語は，一つもないであろう。格現象として表われないものは，有形，無形に，種々の他の表現手段を使用する事によって，その代用を行っているのである。英語の場合は，その代用を主に前置詞を用いる事によって行っているとされている。

一般に格の形によって表現する代りに，前置詞を用いる事は，理解という点で顕示的で近代的手法だと云われる事もある。前置詞で示される表現には，常に偶然的なもの，分離可能なものの感じが漂い，格的表現には，非分離的で，抱合的な雰囲気が漂っているとされている。二つの手法の間には，表現の効果と色調の点で，微妙ながらも大きい差異が認められるのである。近代語を古代語と対比的にみた場合，前者が全ての面に於いて，顕示的な事が特徴的だとされている。この点の相違は，両者の言語意識の質的な違いや表現様式の本質的な違いを示す一つの指標であるとも考えられるのである。

2. 格と文

格とは，事物，対象の表現に於ける位置や動態などを示すものである以上，それが顕在的であるか潜在的であるかは別にして，それを持たない言語は存在しないと思われる。文を成立さすのは，根本的には格の機能であると云えるのである。文を形成するという事は，主体が対象を表象によって切り取り，それを線条的に再構成するという事であれば，そこに主体の機能と云うべきものが

存在するはずである。そして，言語の表現形式に於いてそれを具体的に担うものは，国語学でいう「辞」であると考えられる。

古代文法学に於いて，全ての語を格と時制という観点から分類を試みた人がいる。この分類によると，「性」および「数」は，事物にとって外的な変化であり，「格」は事物そのもののあり方に関するものであるとした。更に「格」は，文に於ける位置によって定まるものであるから内的変化であるとした。

世界の言語の中には，エスキモーの言語などのように，語と文の区別のつかないものもあると云われている。語と文の区別に関しての議論に於いて，次のようなものがある。即ち，「語は語を生じ，文は文を生ずると共に，語は又，文を生じ，文は却って語となり，或いは直線的に，或いは曲線的に進んでやまないものが言語である。」という議論である。この議論によると，文と語は内部に於いて明確な区別を持っていないという事になる。これは，国語学者のいう「詞の存在は，むしろ辞によって，又はその中に於いてである」と相通ずるところがあり，人間の意識にとっての単位は，根本的には語ではなくて，文であり，語は文を分節する事によってはじめて存在する事になる。更にこの事は，人間としての意識にとって，格は本質的なものである事を意味する。そして，その意識は民族の歴史を反映するから，格の現象に民族の伝統的な事物の把握の仕方——認識方法——が最もよく現われている事になる。認識に於ける主観的なものは，認識する人間がおかれている客観的条件を反映したものであるはずである。換言すれば，現実を認識する立場が異なれば，異なった現実，異なった対象のとらえ方をするはずである。

一般に格は，歴史の発展段階に於ける論理の範疇を反映し，又，論理への希求を持っていると云える。ところが一方，格は論理に逆行する心の声であり，時には，情緒的なものを発露する事もある。即ち，前論理的情緒性を反映するのである。更にそれが形式として文に固まると，今度は逆にそれが論理に拘束を加える事になる。この事は，構文と思考の間にギャップを形成する要因となる。このギャップは，根本的には事象の把握の顕点である格の現象に起因する

と云える。

格の現象には，論理性と前論理性が交錯している。全体的な傾向としては，論理性への移行の過程と考えられる。

3. 格形の成立

話し言葉に於いては，音調，強勢とか感情などの周囲の雰囲気が援用されるので，「花・桜・美しい」といった零記号的表現で伝達可能の場合が多い。これは，幼児の言語修得の最初の段階でもよく見られる現象である。

心理学的観点から，サイン，場面，言語などの関係を考えると次のようになる。即ち，「サインは全場面を志向するが，しかし言語がその発生地たる全場面を離れて，サインとして独自の発達をして来るに従って，それは場面の全体を直接かつ端的に志向せず，たゞ場面のうちの本質的な側面だけを志向して，他の部分を内顕的に志向するにすぎなくなる。これが，いわゆるサインの有する意味である。はじめ，サインは直接かつ端的に全体場面を志向するものであったから，サインを云う事は，直ちに全体場面を思い浮かべる事を意味した。そこには，全体場面の有する全ての感情，雰囲気が共に存在した。サインは，これら全てを持って来る事が出来た。しかし，サインが意味として発達すると共に，これは感情，雰囲気を不必要なものとして疎外し，サインが本質的と考えるものだけをとり出す事を許すようになった。」である。これを日本語の例で考えてみると，「テニヲハ」で表わされる格助詞など他の表現要素を加えて，全体の場面を完全に再現しようとすると云うのである。

モンゴル語，満州語などアルタイ系言語のより古い段階では，前述の零記号的表現が多く見られる。もっとも現代語でも，前後関係が明白な時には，格形，特に主格，対格を省くのが普通である。これは，サインの意味としての発達過程の度合い，即ち抽象化の度合いを示しているように思われる。

ところで，前述の「花は桜が美しいです。」という文に於いて，「花」・「桜」・「美しい」の間は，表現としては，もともとは空白であったと考えられる。し

かし，空白の後では断絶が生じて，まとまりを欠く感じを持つようになった。特に書き言葉ではそうである。ここに対象と主体との接点に潜在していた格意識が表現としての形態をとり，空白を埋める事になるのである。言語は宿命的に時間の流れの上に立った線条性という性質を持っている。そこでは，同時的全体として把握された直観は常に分節の作用を受けねばならない。更に前述のサイン自体の分化によって，直観——全体の表現——は，もう一つの分節を受けて表現されねばならないのである。この宿命的な時間性を切断し，主体と対象を明確に位置づける事によって，直観を表現として完全な形にしようとする機能をも，格形は担っていると考えられる。ここに於いて，格意識は言語の宿命である線条性の中で，表現として定着する。それ故に，空白をうめる音声的形態は，最初は連結するにふさわしいと思われれば，どのような形態でもよかったと思われる。しかし，線条性という点から見て，短い程よいのである。事実，総じて，どの言語に於いてもこの傾向がある。格形は，ある関係概念を表わすのには，この形を，又，他のそれには別の形をというように，民族の感情，情緒に合致すると慣用的に使用されるようになって，次第に定着して来たように思われる。格形成立の基盤は以上のようにして確立されたと考えられる。一般に書き言葉の定着の遅い程，古い格形とその用法をよく保存している。早く書き言葉として定着したところでは，表現の準備が進み，格は論理の体系へとより傾斜していくのである。

4. 格と認識及び表現の関係

既に述べて来たように，格の生来的任務とは，客観世界である対象と認識者である主体との接点に位置し，認識の直観と表現の宿命的線条性との隙間を埋める事にあると云える。直観的認識に於いて，既に無意識的に格は存在していたが，表現に於いては，根源的には，空白部であったのである。この空白部の形態は，本来，恣意性を持つものであった。究極的には空白部に入れるべき形態は，その民族にとって習慣的な気質に合致すれば，何でもよかった事にな

る。そこには試行錯誤的過程を経て，その民族の伝統的気質，習慣に最も合致したものが支配的になって来たのである。この支配的になって来たものが，今度は意味を作用するようになる。又，この試行錯誤的過程は，民族のあらゆる伝統的，習慣的なものを背景としているが，その指標は論理的なものにおかれて来たと思われる。それ故に，一旦表現上に音形として存在を獲得した格は，この過程でその民族の精神形態と照応して，論理性への指標を持つと思われる。

認識と表現という点をもう少し掘り下げて考えてみると，一旦シンボルを獲得した人間の意識は，歴史の発展によって拡張する事になる。直観的，全体的認識は，使用されている言語との照応によって，やはり分節されていく過程と見る事が出来る。この認識の分節は，段階的，時間的制限をまぬがれない。ここに認識の段階とも云うべき意識順序が生ずる。意識順序がそのまま言語の線条性にのせて表現されるとは限らない。西欧の言語，特に現代英語などでは，一般に動詞は常に主体的に用いられる事は周知の如くである。「主語＋動詞＋目的語」という順序は，主体から発した行為の方向が順次目的に及ぶことになり，事の自然に最も近いという事になる。即ち，ここでは意識順序と表現順序がほぼ並行していると云える。一方，これとよく対比される日本語に於いては，動詞は文の最後に来る。これは意識順序と表現順序との非並行性，まさに逆の方向を示していると云えるようだ。しかしながら英語でさえ古い段階では，動詞に関して，日本語のような語順になっていた。一般に，古代語の段階では，ヨーロッパ諸語も日本語と同じ語順であった事は，よく知られている事実である。

又，合成語の分析，特に指示代名詞「コソアド」系列の分析から判断すると，次のようになる。現代語では，「かれこれ」，「あちこち」，など遠いものから近いものへの認識方法をとっていると云える。更に，「こなたかなた」は，古事記，日本書紀，万葉集，竹取物語などにみられ，「かなたこなた」は，新古今集あたりにみられるし，現代語にも例外的に「ここかしこ」があることが知ら

れている。これらの事から，日本語では，言語的空間をうちたてる為に，近いものから遠いものへの方向順序に依存して認識した時期から，その逆の遠いものから近いものへと認識した時期に移ったか，或いは，両者を共存させて，可成り後になって，後者の遠くから近くへの認識方法が主導的になっていったとみる事が出来るとされている。この事を考慮に入れて認識と表現の関係をみると，日本語に於いても極めて古い段階では，現代英語のように事の自然にかなった表現をしていたと推測されるのである。

認識，表現，順序などに関して，全体的な流れをまとめてみると次のようになる。尚，英語には，対象よりも主語を重視した過程，即ち言語に於ける主体性確立の歴史があったとされている。

［A］ 意識順序と表現順序との並行というより直観，即表現

⇩

［B］ 表現順序が意識順序の逆

（日本語，アルタイ諸語，ヨーロッパ諸語の古い段階）

「主体制確立の歴史」 ⇩

［C］ 意識順序と表現順序との並行，事の自然と並行

（現代英語など近代西欧語）

［C］の段階は，［A］の段階にもどったのではなくて，一定の特徴，性質などが，別の段階で繰り返される事である。換言すると，古い形式への外見上の復帰であると云うよりも，分析的な洗練された認識形式の基礎の上に再生されたものと見るべきである。又，［C］段階に於いては，認識と表現が並行していて，格関係は無意識的に存在しているので，勢い，格は，顕現的には現れずに，語順や前置詞に委ねられる事になる。ところが［B］段階に於いては，少なくとも認識は表現上，逆の方向を示す故，そこにはどうしても格を明確に表現の上に示す必要がある。事実，［B］に属する言語に於いて最も多くの格の現れ

と，その用法の多様性を見る事が出来る。そこでは，少なくとも文を完結せねば，自己の認識を十分に伝達する事が出来ない。伝達する本人にとっても，一応，見通しを立てておく必要があり，直観を持続さす努力が必要である。格表現上では，対象と主体との結節点を強調する事によって常に直観を見失わないようにする必要がある。勿論，結節点の中でも自ずと負担の軽重が出てくるし，更にどの部分の結節点に重点をおくかによって同じ対象とみられるものの中にも，差が生じてくる。そこに各民族の認識，表現に相違が認められるようになり，ひいては，それが各言語の本質的な特徴を示す事になるのである。

5. 格形と多様性

表現上に於ける格形の成立については，すでに論述して来たように，原初の段階では格は，まさに主体と対象の繋ぎ——結節点——であって，直観と言語表現の宿命的線条性のギャップを鋭く埋めていたのである。（尚，原初的段階では，論理性よりも直観が意識に於いて重視されていたと思われる。）簡単に云うと，主体と対象が直接的に結ばれていたのである。この時点に於いては，格形は原初の形態に重点がおかれていたであろうと考えられる。ところが対象から切りとられた「詞」は，時間の流れと共に抽象化されていって，対象から分離の方向に進んでいったのである。「詞」の抽象化によって，「辞」である格は同様に抽象化されていったのである。すると，直接的であった結節点は，間接的なものに転化し，又，直観と線条性のギャップをつくり出す事になる。これは格形自体が音形として線条性を中に組み込まれるから，格形自体が鋭い直接的作用を失えば，必然的にギャップを増加させる事になるのである。

次にここで問題になるのは，音形に重点があったものから意味を作用するようになる段階への過渡期，直観から論理の指標を意識するようになった過渡期とも云うべき時期である。この時期は，明確には設定し得ない。現代に於いても格に関して前論理的とも云うべき古い表現形式が残っている。格が意味を作用させるようになった時点で，すでに音形として習慣的，伝統的に固定してい

た表現が存在していた事もあろうし，又，それがその言語の長い使用の歴史を通じて，更に現代になっても生き残っている場合もあるだろうと思われる。書き言葉に於いては，話し言葉の伝達に作用したと思われるイントネーション，アクセントなどのプロソディックな面及び身振りなどを含めた場に於けるモダリティが排除されるのが普通であり，対象から切り取られた抽象の段階で，それは固定化される。論理の加重が大きくなるのである。これを格の過渡的段階の一エポックと考えられる事も出来るかも知れない。

過渡期は一般に，どんな現象でも種々の混乱，錯綜がおこって来るものである。格形に於いても同様である。格形が表現上，音声的に表われた時点では，音形に重点がおかれていたという事から，同じ格形に於いてもアクセントなどプロソディックな面での差異によって，機能の区別があったかも知れない。ここに書き言葉の導入があったりすると，それが制限され，一種の錯綜が生じて来るという可能性も考えられる。言語現象の種々の動きは，単なる論理の枠を越えるものである事は，よく知られている事柄である。格の場合も同様で，各言語に於ける流動的な格の拡大，縮小の機能を多種多様の手段を講じて処理しているわけであるが，限られた格形に可成りの負担がかかっている事も否定出来ない。格現象の多様性，複雑性が生ずる所以である。

6. 用語としての格の歴史と意味

文法用語としての格は，英語では case，フランス語では le cas であって，この cas はラテン語の cāsus に由来する。cāsus はギリシャ語の ptôsis の訳語であって原義は，骰子を投げころがす事を指していた。今日では一般に「名詞，形容詞，代名詞が文の中で他の語に対して有する色々な関係を表現する色々な語形式」の事を云うのであるが，単に文と語の二つの対象間の一つの関係を言語的に表現する形式のみなのではなくて，それは文全体に対する関係である。具体的に格の一般的な定義を行う事はむずかしい。ギリシャ語の ptôsis は最初から今日のような意味に用いられたのではなかった。例えば，Aristotle

が動詞の modification について ptôsis を考える場合，それは現在時制に対応する未来及び未完了時制の事であり，又，名詞について考える場合，それは，今日の主格に対応する変化形式である斜格の事であったのである。このptôsis を名詞及び冠詞＋代名詞の語形式に限って用いるようになったのはストア派の人達からであり，彼等は更に Aristotle のいう‘ónoma’をも格の一つに数え，直格と名づけて垂直線で示し，他の変化形式を斜格と称して斜線で表わしたのであった。彼等は更に，この斜格の中に四つの格を認め，結局，格としては，直格である主格に対して，斜格として，対格，属格，与格，呼格を認めたのである。この格組織がラテン文法に導入されたのであるが，その際ラテン語には更に一つの格，奪格を設けたのである。いずれにせよ，このようにptôsis が今日のほぼ同様な意味で用いられるようになって来たのは，ストア派以来の事である。ところで，この当時は，格決定の基準は主として語形式にあったようである。

このようにギリシャ文法に於いては五つ，ラテン文法では六つの格が認められたのであるが，この格組織，格用語が中世やその後のインド・ヨーロッパ諸語のそれの基礎になったと考えられる。尚，その後のインド・ヨーロッパ諸語の研究によって，位格，造格などが認められるようになったけれども，この全ての格形式が，インド・ヨーロッパ諸語の全てに認められていると云うのではない。仮定的なインド・ヨーロッパ祖語に於いては，主格，呼格，対格，属格，与格，奪格，位格，造格の八つが認められているが，現実の言語でこれを具えているのはサンスクリット語のみであるとされている。他の言語ではいわゆる格の融合によって幾つかの格が一つに統合されているのである。例えば，ラテン語では位格は若干の痕跡を残しながら与格，奪格に一致し，造格は奪格と一致しているとされている。その結果，ラテン語は六つの主要な格を有するのであり，ドイツ語では四つ，古代フランス語では二つ，多いところでは，語族は違うけれどもフィンランド語は十六の格が認められている。このように格の数は各言語によって異なるのである。

ところでこの格の融合という考え方は，その背後にそれぞれ独立の格の存在を仮定するものであり，ここに格形式と格関係の対立を生ずることになる。

日本語には名詞自体に格形は存在しない。格は国文法で云うところのいわゆる格助詞によって表わされる。それらは，「が」，「を」，「の」，「に」，「へ」，「と」，「より」，「から」及び口語の「で」である。インド・ヨーロッパ語のいわゆる呼格に振りあててよく用いられる「よ」は格助詞に加えられていない。間投助詞だと云うのである。

ここにあげた日本語の格助詞の定義の基礎或いは示唆は，インド・ヨーロッパ諸語の上に立てられた文法に大体対応するものに求める事が出来ると思われる。

言語によって格の数は異なるという事はすでに述べたところであるが，格組織にも大きい差がある事も自明の事である。現に同時代の各言語間に相違が認められるだけでなく，同一の言語にも歴史的に見て大きい相違が認められる。例えば英語の例など若干すでに述べたところである。しかし格の関係自体に著しい差があったとは思われない。格の関係自体は，格の表とは別である。同時に格の数にも拘束されるべきものではない。言語はいかなる関係をも何らかの手段を以って包含し，表現していくものである。手段は必ずしも有形的なものとは限らない。言語の構造には，本来，無形の表現を許すだけの一般に「ゆとり」があるものである。言語の生命力は，この「ゆとり」の中に存在すると云ってよいくらいである。

このように格は，多様で複雑でしかも奥深い存在であるので，それに対する考え方，扱い方にも色々と議論の分かれるところである。例えば，英語に例をとって考えてみると，次のようになる。先ず形態を中心にして，格分類を行う立場がある。古代英語では名詞に主格，対格，与格，属格の四格を認めるが，中世英語の後期以後については，主格，対格，与格が形態上同一であるところから通格を考え，名詞には通格と属格を考える。一方，人称代名詞については，古代英語では主格，対格，与格，属格の他に造格をもたてるのであるが，

多くの場合，造格は与格に融合されており，中世英語以後は，造格はなくなり，属格も所有代名詞として分離し，対格，与格が古代英語から同形になった為，融合したものと考える。この立場の人としては，Sweet, Kruisinga, Jespersen, などがあげられる。Jespersen によると，格は文法的範疇，つまり機能に於ける事実なのであって，意味の範疇ではないと考えるのである。次に意味関係を強調する立場から分類する方法がある。この分類によると，格形式や語形式，語順，文脈，音調などによって格関係が表示される場合には，これを格とするのである。例えば，語形式の他に「主語＋述語」の語順は主格の決定に寄与し，語順と文脈が与格決定に寄与し，又，音調，句読などが呼格の決定に寄与しているとするのである。即ち，英語の名詞は，属格の為の格形式を有するのみであるが，前置詞を用いないでも，語順，文脈などによって，古いゲルマン語の主格，呼格，対格，与格と大体同じ格関係が表現できるのである。従って，明確な格形式がないからと云って，格がないという事はないとするのである。更に，前置詞句は，格関係を表現するのみならず，機能的にも格と同等のものとして，属格相当句，与格相当句などを認めるのである。このように語形式以外の外的形式による場合でも，格関係を表現するものを格と認める立場をとるのは，Sonnenschein であるが，これは，Jespersen などに比べて，意味関係の方を重視している事は確かである。しかし，この立場も形式に対する配慮が全然ないという訳ではない。それは，属格相当句，与格相当句などのような格相当句を認める点，即ち，「格」と云わずに，「格相当句」という用語を使っている点である。

この点で，更に意味の面を重視しているのは，Curm である。Sonnenschein の云う格相当句をも前置詞与格などとして，格の一形式とするのみならず，この格の考えを節にも適用しているのである。

このように格の分類について，色々な考え方が出るのは，結局，言語に「形式」と「意味」の二つの要素が存する事に起因するのであって，Sweet や Jespersen などは形式を，Curm は意味を強調し，Sonnenschein はその中間の

立場をとるという具合に，人によって強調する点が異なる為である。

結論的に云うと，格を意味の面から考える事は，言語の本質から考えて誤りと云う事は出来ないのであるが，意味に於ける分類がそのまま個々の言語に於ける当該文法範疇の分類と考える事は出来ないと思われる。言語はその発達段階によってその多様性は異なるのであって，その機能は，恒常的な論理的な関係，枠組では律し切れない面がある。従って，「文法に於ける格」を規定するにあたって，形式の要素を除外する事が出来ないのは確かである。しかし同時に，格は単に形式のみの問題ではなく，多分に意味の問題でもある。故に，格の考察にあたって意味機能を問題とするのは当然の事であると考える。

［Ⅱ］

次に格現象，格関係について，モンゴル語，満州語などアルタイ諸語，英語，ドイツ語などヨーロッパ諸語及び日本語を主な題材として，具体的に若干の例文を使って，比較対照する事にする。対格，主格とそれに関与する格を主な対象として若干の考察を試みるのである。尚，モンゴル語の例文はロシア文字を使用して表記する。

7. 対格表現の構造

一般にどの言語に於いても，対格は単に目的をとらえるばかりでない事は，周知の事実である。格は本来，表現に於いて最初から成立していたものではなくて，徐々に成立して来たものである。対格の場合には，民族にとって恣意的な形態として存在し，歴史の中で段々と目的語をとらえるという面が主要な機能となって来たと思われる。結節点とも云えるべきものがそこに固まって来たのである。すでに述べたように，結節点とは，いわば対象と主体との接点という意味と，民族の対象の把握の仕方の表現上へのあらわれという意味合いとを兼ね備えたものである。固定が来れば，人々はそれを意識するようになる。そ

れは，ある場合には，その時点に於ける不合理的な用法を論理的に整理しようとする方向にむけるであろうし，又ある場合には他の固定部分が強力で，人々は，その既存の表現形式に慣れ，それに逆に規定されて，認識方法をそれに依存させる事もあろう。更にその事に気づいた人，特に文法学者などは，不合理的なものを，意味の上から意義づけようとする。どんなに恣意的に選択されたものであるとしても，本来，客体的意義を有するものに，所謂，対格形とされる音形が附加される傾向があった事は否定出来ない。

本来，表現に於いては，自己以外は全て対象である。時として自己をも対象化して認識する事も出来る。対象は対象である限り，客体的である。格とは対象と主体との接点にあるものと把握するのであるから，対象を客体的なものとして主体がとらえるところに対格は成立する。対格の用法の複雑性は，この根本的な点に起因しているものとも考えられる。又，所謂，対象を表示するとされている助詞が日本語に多い(「ガ」「ヲ」は当然として，「ノ」「ニ」にまで，その機能があるという事)，という事も，この事と関係があると思われる。格は，対象を対象としてとらえるところに出発点を持っているのである。格形のうち，主格を除外すれば，対格が最も省略され易いのも，この事と無関係でないものと思われる。即ち，表現するという事は，対象を対象としてすでに認識しており，その時点で格は潜在的にすでに含まれているから，顕現的な形でなくても了解可能なのである。

ヨーロッパ諸語の対格が方向を指示する機能を持っている事はよく知られている。ラテン語 Roman video（ローマを見る），Roman eo（ローマへ行く）のいずれも或る行為の「ローマ」への接近を示している。運動としては積極的な方向をとっている。ドイツ語の fragen（たずねる）がたずねる人を対格に置くのは，この行為の方向の積極性を表わしているのであり，フランス語の remercier（感謝する）もやはり感謝される人を対格に置くと云ってもよいのである。アルタイ系の言語と云われているモンゴル語でも同じような現象をみる事が出来る。

◦алс хэтийг зорих（遠くへ向う）

満州語では多少ニュアンスは異なるが，やはり類似した現象をみる事が出来る。ここでは方向と同時に経由をも示すのである。

◦bira be doofi（河を渡って）

◦dabagan be dabame（峠を越えて）

更にモンゴル語には，伝統的に次のような表現がある。

◦миний үгийг дагаж（私のことばに従って）

◦зарчмыг зорлиж（原則に背いて）

この他に対格を支配する動詞を挙げると，зуйх（～に頼む），усах（～に水をやる），дүүрэх（～に満ちる）などである。

ヨーロッパ諸語にも，このような動詞の格支配の現象があるのだから，別に特異な事ではない。むしろ，これは，アルタイ系諸言語の伝統的，慣習的表現形式とヨーロッパ諸語のそれとの共通点とみる事も出来るのである。又，ヨーロッパ諸語には古典語時代から，伝統的な表現形式である不定法を伴う対格というものがある。そこでは，対格は不定法の主語として立つ事が出来る。これとよく似た現象がアルタイ系諸言語にも存在する。モンゴル語の例として二例をあげておく。

◦Намайг ормогц тэр гарав.（私が入るやいなや彼は出た。）

◦Багшийг ном уншихлаар бид сонсдов.（先生が本を読むとすぐ我々は聞いた。）

次に満州語の例として二例をあげておく。

◦tere gisun be mujangya seme hendifi.....（その音楽は，もっともだと云って，……）

◦tere elcin be isinaha mangyi.....（その使いが到着した後で……）

モンゴル語，満州語ともに，この対格の用法は，零記号的に表現する事もあり，又，属格形が立つ事もある。

前にも述べたように，格形は，もともと論理性を持っていたのではなく，徐

徐に論理を帯びて来たと云うべきである。古代日本語に於いても，従属文中の主語の位置に「ヲ」格が立っている例がある。この表現は，古い時代からの民族固有の伝統形式，即ち習慣的なものであって，その時点ではその民族にとって最も心情に合致していた表現形式と見るべきであろう。

間投詞的に対格を使っている例として，モンゴル語に Цамайг даа, нүдгүй юм үү даа！（お前がか，目がみえないのか，）という表現がある。時として感情が整理し切れない場合や類推などによって主語の位置に対格が来ているのである。

ところで，本来，主格が使われるべき位置に何故に対格が立ったりするのであろうか。直観的なるものを表現する場合，そこには一種の見通しが必要であり，その見通しは，その時点に於ける伝統，精神形態などを包含したところの民族の社会的習慣によって規定される。(この点に関してはすでに述べて来た。) この見通しの過程，所謂，結節点のおき方，強調の度合いによって，こういう表現形式が出て来たと考えられる。更に別の原因としては，格形相互間の類似とか，格形多用による一種の原初的混乱の発生なども考えられる。日本語は，この「ヲ」格の現象に於いて，結節点のおき方，その強調の度合の点で，アルタイ系言語に相通じるものを持っているように思われる。

一般に西欧の言語でも東洋の言語でも顕現的な現象の底流には，類似性が可成り存在するものである。それは，当然の事ながら人間の認識という共通性があるからである。ところで表現形式としての語順の立場から見た場合，アルタイ系諸言語には，それ特有の現象が認められる。そこには，前に幾度か触れた見通しが必要であった。勿論，この見通し自体，歴史から離れたものではない。そして，その見通しの過程で，結節点とも云うべきものの置き方，強調の度合いによって，同質の現象の中にも，その民族の伝統的習慣を反映した相違が生ずるに至ったと考えられる。

8. 与格と主格

日本語には，「腹が痛い」という表現があるが，この場合の「が」を主語を表わす主格の中に入れてよいかは，今までにも色々と論議を呼んで来た問題である。これについて次のような指摘がある。「腹が痛い」の「が」は，実は能動的な名格の指標ではなく，ある大いなる力の加えられる場所を示すにすぎない。「私は画が好きだ」の二重主語的表現で，一見，主格の形式をとるのも実は，一種の非人称的表現形式の残存物かも知れなくて，「雨が降る」や「腹が痛い」などと同様に，この「が」には，能格的なところがあるというのである。又，一方，「水がのみたい」の「が」は，アルタイ語圏渡来の系列（-b〉-m〉-n〉-ngの系列上，-b は対格形とする）から見て目的格と見る考え方もある。

「私は画が好きだ」の「が」の場合，こういう表現をするのは，日本人の認識構造の中に，一種の場所的なるものがあったように思われる。モンゴル語では，「〜が好きだ」という形式の文は，「〜に於いて愛がある」か「〜に於いて愛を持つ」という表現をする。

◦би чанд хайртай（私は，君が好きだ）

このように，「が」にあたるところを直接的に与格で表示する。

ドイツ語では，mir tut es weh am magen（それが私に腹に於いて痛める）という表現をし，モンゴル語と同様，「腹に於いて」と場所的表現をすると云える。この事は，この場所的表現がモンゴル語特有の用法という訳ではない事を示している。

日本語の場合，ドイツ語などのように非人称構文が存在したかどうかは明らかではない。それで，「雨が降る」，「花が咲く」などの表現と「〜が好きだ」，「腹が痛い」などの表現とを分けて考えてみる事にする。前者は，「雨・降る」，「花・咲く」から主格助詞としての「が」の発達によって，表現上に有形的に出て来たものと考えるべきだと思う。後者は，本来，場所的なる格意識，即ち，与格的意識が包含されていたと思われる。実際，次のような表現がある。

◦入道相国舞に愛で給ひて……（平家物語）

◦甘蔗に好いて……（蒙求抄）

特に「～に好き」という表現は，西鶴，近松の作品の中にも現われる。従来，これらの「に」は，動作，感情の対象を示すとされているし，事実，格助詞「に」には，動作の行われる方向を表わす事が出来るのである。起源的には，例文の如く，動作の行われる場所的なものの意識にさかのぼれるように思われる。

このように，格意識と云うべきものと，表現上の格形との間には，ずれがある事は他の格形に於いても当然，予想されるところである。日本語の「テニヲハ」は，心の声として非常な発達をとげ，現段階では，むしろ論理の枠を越えて，極めて情的なものも含め得る程になっている。これに対し，モンゴル語は，直観を極めて直接的にぶつけた格の用法がよくみられ，又，それを現在までよく保存して来ている。

9. 属格と主格

属格が主格的表現をするのは，モンゴル語，満州語，日本語のどの言語にも共通に存在する現象である。

◦Миний төрсөн орон мөн.（私が生れた国です。）

◦Иймхүү Найдангийн сүүж байхад……（このようにナイダンが座っている時……）

◦gisin i ehe de……（ことばが悪いので……）

◦mefai tehe susu……（祖先が住んだ故郷）

満州語では，主格は零記号的に表示されるのが普通であるが，従属文の主語に限って，属格接尾辞 -i で表わされる事が多い。モンゴル語に於いても同様な事が云える。従属文では，人称代名詞の変化した語尾である -ийн か ын を付加するのである。又，主文に於いても，現代語では，нь（起源的には，人称代名詞の物主格が変化した一種の属格語尾）を附加して主語を表示するのである。日本語に於いても主語の位置に「の」格が来る事があるのは，周知の事実

である。このように，意味的，論理的に主語の位置にありながら，伝統的に斜格をとるものは，多くの言語に認められている。そして，これは何らかの形で主文への従属という点で関連づけられるという事は，認識と表現という点からみて興味深い事である。ドイツ語，ロシア語に於いても，非在者は文の主語に立つ事が出来なくて，それは属格で示される。非在者は無力であり，能動的でないと考えられているのである。即ち文中では非在者は従属的なものと考えられる。従属とは表現上ばかりでなく意識に潜むものも含めて考えるのである。

英語に於いても動名詞の意味上の主語は，属格で表わされるし，又，不定詞の意味上の主語は，対格で表わされる。又，所謂，独立構文で，意味上の主語を表現するのにラテン語では奪格，ギリシャ語では属格，ドイツ語では対格，古代英語では与格，近代英語では主格が用いられるとされている。これは，独立構文の意味上の主語には，言語によって色々な格形が立ち得る事を示しているのである。この事は，多くの言語に表現上の差はあるが，底流として同質性を認め得る要素の一つだとみて差しつかえないと思われる。この表現上の相違は，習慣，文化，歴史ないしは，その総体とも云える精神形態の反映とみる事が出来る。我々が論理的に主語とみなしているものでも，時には，色々な格形で表現されていると云えるのである。これが所謂，格の含みであり，ゆとりでもある。

参考文献

- 「格と人称」宮部菊男著，研究社
- 「日本文法」口語篇・文語篇，時枝誠記著，岩波全書
- 「言語民族学」泉井久之助著，秋田屋
- 「言語の構造」泉井久之助著，紀伊国屋書店
- 「ヨーロッパの言語」泉井久之助著，岩波新書

その他多数。